

中世期言語資料における接続詞「サテ」の様相について

百瀬 みのり

1. はじめに

日本の歴史的区分の中で、平安時代末期から鎌倉時代、それに次ぐ室町時代は、いわゆる古代から中世への過渡期とされている。そしてその時代に、日本語もまた古代語から中世語へと変化したとされている。中世語の特色としては、漢語、ポルトガル語などの外来語の流入、音象徴詞の増加などによる語彙の増加、音便の増加と定着、開音・合音の出現と統合による音韻体系の整理、待遇表現の拡充や用言の活用整理などによる文法の近代化などが、その主なものとして挙げられよう。

その中で接続詞の出現は、中世期の日本語に見られる大きな特徴であり、日本語を古代語から近代語へと発展させた要素として見落とすことのできないものである。

本発表では、後期古代語の姿をとどめる、平安時代末期の資料『今昔物語集』と、中世期の言語資料として、室町時代の口語表現が豊富に記されている抄物資料、キリシタン資料を取り上げ、その中で使用されている接続詞「サテ」の意味・機能について調査し、その報告を行うこととしたい。

2. 本発表の目的

平安時代後期成立とされる『今昔物語集』を踏まえ、中世期の言語資料である抄物資料、キリシタン資料における接続詞「サテ」の様相について、その意味・機能を調査、報告する。今回は特に、主には中世期の言語資料中において、接続詞「サテ」と同様に豊富に見られる接続詞「サルホトニ」の意味・機能との比較の形でそれを示すこととする。

上記を踏まえ、本発表での具体的な課題は以下と設定する。

課題1 『今昔物語集』各巻の接続詞「サテ」の分布状況と、それが表す意味・機能についての報告。

課題2 抄物資料とキリシタン資料中の接続詞「サテ」、「サルホトニ」の使用状況と、それが表す意味・機能についての報告。

課題3 課題1と課題2を総合し、中世期の言語資料中の接続詞「サテ」の様相についてまとめる。

3. 用例採集資料について

- ・『今昔物語集』
 - ・『日本書紀兼俱抄』
 - ・『日本書紀桃源抄』
 - ・『天草版 伊曾保物語』
 - ・『天草版 平家物語』
 - ・『コリヤード 懺悔録』
 - ・『どちなきりしたん』（カサナテンセ本）
- 上記とする。⁽¹⁾

4. 調査結果及び考察

◆『今昔物語集』における接続詞「サテ」について

・『今昔物語集』は全31巻（うち、巻8、18、21は欠巻）。このうち、「サテ」の用例は前半よりも後半の巻（巻24以降）に集中している。⁽²⁾

・特に用例数が多いのは巻29で63例である。巻29は、後半の中でも「サテ」の用例数が突出している。

・『今昔物語集』の部立（内容別による分類）によれば、巻24からは本朝説話のうちの世俗説話が始まる。つまり、接続詞「サテ」の用例が顕著に増加する巻24以降は、『今昔物語集』の本朝・世俗説話の始まりと重なるといえる。⁽³⁾

・さらに、「サテ」の用例数が最多の巻29は「本朝付悪行」という部立である。

この巻中の説話の特色としては、

①各話が長く、語量が豊富②話の内容のテーマは人間の悪行③話の登場人物の位相が多様

ということなどが挙げられる。

つまり、

A. 話の内容が現実的、写実的なものであり、それらを時間軸に沿って展開させていくため。（話の内容による理由。）

B. 話の語り手が、話の内容中の事件や人物、また聞き手に対して、評価や述懐の言表を行うため。（話の語られ方による理由。）

上記A、Bの両側面から要請され、かつ、この巻が本朝の世俗説話を集めたものであることから、和文脈系統の接続詞「サテ」が多用されたのではないかと推測される。⁽⁴⁾

・『今昔物語集』中で見られる「サテ」の意味・機能には、

A.『今昔物語集』全体に渡って見られるもの。

（[順接 場面の進行]、[順接 場面の展開]、[話題の転換] など。）

→「サテ」の元からの意味・機能。

B.『今昔物語』に局部的に見られるもの。

（[結果・帰結]、[原因・理由]、[逆接] など。）

→「サテ」の新しい意味・機能。

大きく分けて、上記A、Bの二種がある。

「サテ」の用例が頻出する本朝世俗説話の後半部には、B. が集中している。⁽⁶⁾

◆抄物における接続詞「サテ」、「サルホトニ」について

『日本書紀兼俱抄』		
「サテ」 全 77 例	文頭 72 例	[結果・帰結]、 [順接 場面の展開] など。
	文中 5 例	[単純な接続]、 [つなぎ] など。
「サルホトニ」 全 218 例	文 頭 218 例	[結果・帰結]、 [順接 場面の展開] など。
	文中 0 例	

『日本書紀桃源抄』		
「サテ」 全 52 例	文頭 47 例	[結果・帰結]、 [順接 場面の展開] など。
	文中 5 例	[結果・帰結]、[単純な接続]、 [つなぎ] など。
「サルホトニ」 全 215 例	文 頭 215 例	[結果・帰結]、 [原因・理由] など。
	文中 0 例	

(6)

上記から

- ・「サテ」一主に文頭で使用されるが、文中で使用されることもある。

「サルホトニ」一文頭で使用される。

という傾向が観察された。

- ・両抄での「サテ」、「サルホトニ」の意味・機能の類似点と相違点を見ると

A. 類似点 文頭「サテ」と文頭「サルホトニ」共に、[結果・帰結]を表す。

B. 相違点

文頭「サテ」→上述の他、[順接 場面の展開]、[順接 場面の進行]など、文頭「サルホトニ」にはあまり見られない意味・機能を表す。

文頭「サルホトニ」→上述の他、[原因・理由]など、文頭「サテ」にはあまり見られない意味・機能

を表す。

- ・文中「サテ」には、[単純な接続]、[つなぎ]の意味・機能を表す例が見られた。

（文頭「サテ」には、上記の意味・機能は観察できない。）⁽⁷⁾

◆キリシタン資料における「サテ」について

『天草版伊曾保物語』		
「サテ」 全 17 例	文頭 10 例	[順接 場面の展開] など。
	文中 7 例	[話の切り出し] など。 ※ 7 例中 6 例は発話の引用。
「サルホトニ」 全 0 例	文頭 0 例	
	文中 0 例	

『天草版平家物語』		
「サテ」 全 77 例	文頭 61 例	[順接 場面の展開]、[話題の転換]、 [話の切り出し] など。
	文中 16 例	[話の切り出し] ※ 16 例中 10 例発話引用、[単純な接続] など。
「サルホトニ」 全 6 例	文頭 6 例	[話題の転換] など。
	文中 0 例	

『コリヤード 懺悔録』		
「サテ」 全 4 例	文頭 2 例	[話題の転換]、[話の切り出し]。
	文中 2 例	[つなぎ]。
「サルホトニ」 全 0 例	文頭 0 例	
	文中 0 例	

『どちなきりしたん』（カサナテンセ本）		
「サテ」 全 3 例	文頭 3 例	[順接 場面の展開]
	文中 0 例	
「サルホトニ」 全 0 例	文頭 0 例	
	文中 0 例	

(8)

上記から、

- ・キリシタン資料中では、「サテ」が使われることが多く、「サルホトニ」はあまり使われない。
- ・文頭「サテ」は、[順接 場面の展開]、[話題の転換] など

文中「サテ」は、[話の切り出し]、[つなぎ]などがその表す主な意味・機能であると言える。

◆まとめ

今回の調査の結果、分かったことは以下である。

中世期の接続詞「サテ」と「サルホトニ」について、

- ・中世期の言語資料において、キリシタン資料は「サテ」を主に使用し、抄物資料は「サルホトニ」を主

に使用するという傾向が見られる。

- ・「サテ」は主に文頭で使用され、文中での使用も少々見られるのに対し、「サルホトニ」は文頭での使用が専らである。
- ・文頭に使用される「サテ」と文中に使用される「サテ」、また、文頭に使用される「サルホトニ」と文中に使用される「サルホトニ」には、その表す意味・機能に違いが見られる。

以上である。

接続詞「サテ」と「サルホトニ」については、抄物中での使い分けが議論となり、「その使い分けについて有意な差はない」というのが、その結論であったようである。⁽⁹⁾

しかし、本調査によると、「サテ」のほうが「サルホトニ」よりも、文中の位置における固定度が低く、その表す意味・機能も多様であること、『今昔物語集』などの平安末期の資料で既に、多様な意味・機能を表す接続詞として見えていることなどから、「サテ」は、指示詞や接続助詞などから接続詞が成立してきた初期の段階から見られる接続詞であり、かつまだ接続詞としての意味・機能が固定、独立しておらず、それが故に、多様な意味・機能を表し、さまざまな使用が資料中で見られるものであり、一方、「サルホトニ」は、「サテ」よりも後から現れ、接続詞としての意味・機能や文中の位置などの固定度が高く、独立性が高い接続詞として眺められるといった違いが考えられるようである。

言い換えれば、接続詞として原始的で、多様な意味・機能、用法をもつのが「サテ」であり、接続詞として独立的で、その表す意味・機能や用法がほぼ固定されているのが「サルホトニ」であるとも言えるのではないだろうか。

また、抄物とキリシタン資料といった、資料の特性も考察すべきであろう。従来から言われているように、抄物は仏典や漢籍の講義録、講義の手控えなどといったその用途から、内容の論理関係を明確に記すという姿勢は、文の表記に臨む際の大前提である。よって、そこでは論理の筋道をたどりやすくするために、文の因果関係や文の順次性を明確にする必要がある。

一方キリシタン資料は、室町当時の人々の話し言葉を写し、口頭表現をそのまま使用しており、当時の人々にとって、目や耳になじみのある、受け取りやすい、分かりやすい記載内容であることが必要である。

故に、双方の資料の特性とその成立事情や成立の目的などを考慮した際に、最もそれに適した接続詞が選ばれ、使用されている結果が、抄物では「サルホト

ニ」、キリシタン資料では「サテ」の使用の選択といった結果となっているのではないだろうか。

以上、中世期の言語資料における、接続詞「サテ」と「サルホトニ」の使用には、それぞれが使用される領域の別があるようである。今後はさらに調査の範囲を広げ、

- ・使用領域の別が何に起因しているのか。
- ・使用領域の別と、言語資料の特性にはさらにどのような関係があるのか。
- ・上記の使用領域の別が、この後どのように変化していくのか、またそれは何によるものなのか。

等について、「サテ」と「サルホトニ」以外にも、調査対象とする接続詞の範囲も増やし、調査、研究を行いたい。

(了)

・主な参考文献

- 土井忠生(1942)『吉利支丹語学の研究』靖文社
橋本進吉(1961)『キリシタン教義の研究』岩波書店
湯澤幸吉郎(1970)『室町時代言語の研究』風間書房
清瀬良一(1982)『天草版平家物語の基礎的研究』蹊水社
坂詰力治編著(1987)『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』武蔵野書院
小林千草(1992)『日本書紀抄の国語学的研究』清文堂
・主な参考論文
小林千草(1973)「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94

補足資料 (注)

(1) 用例採集資料

- ・『今昔物語集』嘉承元年(1106)以降間もなく成立か。
日本古典文学大系『今昔物語集』一～五巻。
- ・『日本書紀兼俱抄』(神代上下聞書)文明十三年(1481)吉田兼俱講 相国寺宜竹聞書
京都大学附属図書館所蔵『日本書紀兼俱抄』
続抄物資料集成第九巻『日本書紀兼俱抄・日本書紀桃源抄』大塚光信編
- ・『日本書紀桃源抄』(神代抄)
京都大学文学部所蔵『日本書紀桃源抄』
続抄物資料集成第九巻『日本書紀兼俱抄・日本書紀桃源抄』大塚光信編
- ・『天草版伊曾保物語』文禄二年(1593)成立。
京都大学国語国文学研究室編『文禄二年耶蘇会版伊曾保物語』

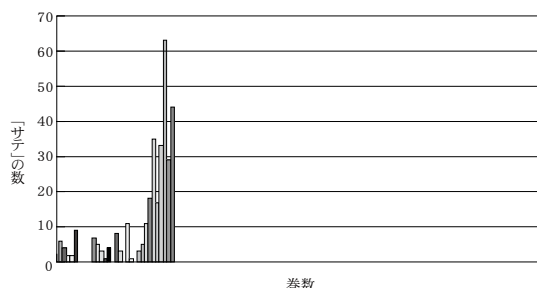
- ・『天草版平家物語』文禄二年（1593）成立。
亀井高孝・阪田雪子氏翻字『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』
- ・『どちりなきりしたん』（カサナテンセ本）慶長五年（1600）成立。
小島幸枝・亀井孝解説 勉誠社文庫56
カサナテンセ図書館蔵『どちりなきりしたん』
- ・『コリヤード 懺悔録』寛永八年（1632）成立。
上智大学図書館所蔵本 大塚光信氏翻字『コリヤード 懺悔録』

(2)

(表1) 『今昔物語集』各巻の「サテ」の数

巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	
6	4	2	2	9	0	0	欠	0	7	5	3	1	4	0	
巻16	巻17	巻18	巻19	巻20	巻21	巻22	巻23	巻24	巻25	巻26	巻27	巻28	巻29	巻30	巻31
8	3	欠	11	1	欠	3	5	11	18	35	17	33	63	29	44

グラフ1 『今昔物語集』各巻の「サテ」の数



(表1)と(グラフ1)より、分かったことは以下である。

- ① 後半の巻ほど「サテ」の用例は多い。
- ② 特に用例が多いのは巻二十九である。(63例)
- ③ 巻二十九は、後半の中でもその用例数が突出している。

(3)

『今昔物語集』の部立てについて

『今昔物語集』は、全体が「天竺」・「震旦」・「本朝」の三部に分かれる。総数1千余りの説話はそれぞれの国に関連したもので、これが、

- ① 天竺説話（巻一～巻五）
- ② 震旦説話（巻六～巻十）
- ③ 本朝説話（巻十一～巻三十一）

に収められている。

①天竺説話と②震旦説話は仏典や仏教説話の翻訳であり、③本朝説話は、巻十一～巻二十までの十巻が仏教説話、巻二十一～巻三十一の十一巻が世俗説話と

なっている。

(4)

『今昔物語集』の巻二十四～巻三十一の部立は以下である。

- ・巻二十四 本朝付世俗 ・巻二十五 本朝付世俗
- ・巻二十六 本朝付宿報
- ・巻二十七 本朝付霊鬼 ・巻二十八 本朝付世俗
- ・巻二十九 本朝付悪行
- ・巻三十 本朝付雑事 ・巻三十一 本朝付雑事

(5)

用例の分類項目名と、そこに分類される用例代表例

- ① [順接 場面の進行] 196
- ② [順接 場面の展開] 79
- ③ [話題の転換] 25
- ④ [結果・帰結] 5
- ⑤ [逆接] 5
- ⑥ [仮定] 3
- ⑦ [原因・理由] 2
- ⑧ [その他] 8

- ①「～『～』。獄ニシテ死ナバ、後生亦三惡道ニ墮セム事疑ヒ不有ジ。然レバ、我レ、故ニ犯シ成シテ被捕レテ獄ニ居ナム。然テ懇ニ、我レ、法花經ヲ誦シテ獄人ニ令聞メム』ト思テ、～」(巻十三 本朝付仏法「春朝持経者、顕経験語 第十」)

(獄の内で死ねば、死後もまた三惡道に落ちてしまうことは疑いない。それならば、私は、わざと罪を犯し、捕らわれて、獄にすることとしよう。そうして手厚く、私は、法花經を唱えて獄の内の人々に聞かせよう。)

- ②「此レモ、前世に大臣ト女靈トノ善知識ニコソハ有ラメ。亦、尚々法花經ヲ書写シ奉タル功德、実ニ經ニ説給ヘルニ不違ズ。此ク、兜率天ニ生レタレバ、哀レニ貴キ事也。然テ、彼ノ女靈ノ住ケル所ヲ半夜ト名付タリ。」(巻十四 本朝付仏法「女依法花力転蛇身生天語 第四」)

(これも、前世での大臣と女靈とのまさに善知識であつたのだろう。また、やはり法華經を書写し申し上げる功德は、実に經にお説きになっているところに違わない。このように、兜率天に生まれたのが、哀れで貴いことであるのだ。そして次に、その女靈の住んでいた所を半夜と名付けた。)

- ③「若キ男ノ云ク、『己レハ仏ヲ礼ムガ為ニ寺ニ詣ゾル也。然テ、其ノ持タル蛇ハ何ノ料ゾ』ト。」(巻十六 本朝付仏法「仕観音人、行龍宮得富語 第十五」)

- (若い男が言った。「私は仏を拝む為に寺に詣でたのだ。ところで、その持っている蛇は何の科料なのだ。」)
- ④「～、女即ち死給ヌレバ、天皇・后歎キ給フト云ヘドモ更ニ甲斐ナクテ止ニケリ。然テ其ノ墓ヲバ大和ノ国ノ城下ノ郡ニシタリ。」(卷三十一 本朝付雑事 大和ノ国ノ箸ノ墓ノ語 第三十四)
(女はすぐにお亡くなりになり、天皇や后がお嘆きになるも、もう其の甲斐もなくなってしまった。そして結局、その墓を大和の国の城下の郡につくった。)
- ⑤「～水走り出ルニ随テ、其ノ穴ヨリ多ノ魚共出ケレバ、期モナク取テケリ。然テ其ノ後、其ノ穴ヲ塞ケレドモ、水ノ出ル勢強クテ、～」(卷三十一 本朝付雑事 讃岐ノ国ノ満農ノ池類シタル国司ノ語 第二十二)
(～水が走りでるに従って、其の穴から多くの魚が出てきたので、ほどなく取れてしまった。しかしその後、その穴を塞いだのだが、水の出る勢いが強くて、～)
- ⑥「～。我ガ躰ヲ見ムト思サバ明日其ノ持給ヘル櫛ノ箱ノ中ニ有ル油壺ノ中ヲ見給ヘ。然テ其レヲ見給フトモ、恐ゾ怖ルヽ心ナクテ御也。」(卷三十一 本朝付雑事 大和ノ国ノ箸ノ墓ノ語 第三十四)
(～。私の姿を見たいとお思いなら、明日その、お持ちの櫛の箱の中にある油壺の中を御覧なさいませ。そしてもしも仮にそれをご覧になっても、恐れこわがるお心をおもちにならぬように。)
- ⑦「～、此ノ男ノ謀ケル様ハ、此ノ主ノ女ヲ美濃ノ国ニ将行テ売ツル也ケリ。然テ目ノ前ニ～。」(第二十九 本朝付悪行 近江ノ国ノ主ノ女ヲ将行キテ美濃ノ国ニ売レ男ノ語 第二十四)
(～。この男が謀っていたのは、この主の女を美濃の国に連れて行って、売ってしまうことであった。なぜなら、目の前に～。)
- (6)
それぞれの用例代表例は以下である。
『日本書紀兼俱抄』
・文頭「サテ」
(結果・帰結)「古文字ハナイソ 人々ロツカラ云事ソ サテ古ト云ソ」(上 10ウ)
(昔は文字がない。人々が口で言っていたのだ。だから古というのだ。)
(順接 場面の展開)「父ヨリ子ノ生長スルハ弁ソ サテ祝シテサテホソノヲヽキルソ」(下110オ)
(父より子が生長するのは当たり前のことである。

- だからお祝いをして、そして次にへその緒を切るのだ。)
- ・文中「サテ」
(単純な接続)「一書一前代旧事本紀ハ此一書ニ依ト見ヘタソ 第一代ニサテ三神ヲ立ラレタソ」(上 17ウ)
(一書一前代旧事本紀はこの一書に依るとみえる。第一代にそうして三神を立てられたのだ。)
(つなぎ)「サラハ天浮一ハサテトコヲ在所ニ可定ト云ヘハ丹後ノ一(アマノハシタテ)ト定ソ」(上 21ウ)
(では、天浮一は、[さて] どこをそこだと定めるべきかといえ、丹後の天橋立と定める。)
- ・文頭「サルホトニ」
(結果・帰結)「万物ノ姓ハ音声ニソナハルソ サルホトニ名カ自然ニアルソ」(上 2ウ)
(万物の名前は其の音声に具わる。だから、(ものには)名が自然にあるのだ。)
(順接 場面の展開)「心ヲミラルヽニズツナサニシハラク泣ソ サルホトニ此珠出テ試ソ」(下 120オ)
(心を見るのに、その術がないので泣くことにあいる。そして次に、この珠を出し試すのだ。)
- 『日本書紀桃源抄』
・文頭「サテ」
(結果・帰結)「秦ノ始皇ノ大廟ヲ構ルホトニ大秦ト云ソ サテ今モ大秦トカイテウヅマサトヨマスルソ」(上 11オ)
(秦の始皇帝の大廟を構えたので、「大秦」という。それで今も「大秦」と書いて「大秦(うずまさ)」と読ませるのだ。)
(順接 場面の展開)「口寒ニナリテ天上ノ氷ガコラルソ サテ此雪カ水ノ上ニコリテアルヤウニ天地国ノ生スルナリソ」(上 27ウ)
(口寒くなって天上の氷が凍る。そして次に、この雪が水の上に凝り固まってあるように、天地国が生ずるのだ。)
- ・文中「サテ」
(結果・帰結)「御(?)体ノ中テ定脚ハアシハラト云国ヲフマヘテアルソ ホトニサテアシト云ソ」(上 46オ)
(御(?)体の中で、脚を定めることは「アシハラ」という国をふまえてある言い方だ。だから、「アシ」というのだ。)
(単純な接続)「精氣ヲサテシボレハ草木ヨリアブライ

ツルソ」（上 23ウ）
 「精気をそうしてしければ、草木より油が出る。」
 （つなぎ）「天浮橋ハサテドコヲ在所ニ可定ソト云ヘハ
 一説丹後ノ橋立ヲ云ト申ソ」（上 30ウ）
 （天浮橋は「さて」どこをそこだと定めるべきかとい
 えば、一説には丹後の天橋立をいうのだと申
 す。）
 ・文頭「サルホトニ」
 （結果・帰結）「葉二出タル時此ノ木ハナニト云木ト知
 ソ サルホトニテニハト物ヲツケテ心ヲ知ソ」（上
 9オ）
 （葉が出た時に、この木は何の木かを知る。だから、
 「てには」と物をつけて心（意味）を知るのだ。）
 （原因・理由）「コノ書ヲシナヘテ紀ト云ハ何事ソ
 ヤ サルホトニ吾国ハ先天地ニ神ヲ国常立ト云ソ」
 （上 12ウ）
 （この書をおしなべて「紀」というのはどういうこ
 とか。なぜなら、吾が国は、天地に先立つ神がい
 て、それを国常立という。）

(7)

文中の「サテ」の[単純な接続]については、本文
 5 ページ参照。

指示詞「サ」＋接続助詞「テ」といった、接続詞「サ
 テ」成立の初期段階の、単純な接続の意味（「そうし
 て」、「それで」など）は、文が長大化したときにその
 内部で、文が続いていることを示し、文の内容を進め
 るために、文中に入れ込まれる形で使われ、それがこ
 の分類にあてはまるものと現段階では考えている。

文頭の「サテ」、「サルホトニ」などが文の因果関係
 などの論理関係を明示するものであるのに比し、文中
 の「サテ」は文中の文の構成要素が続いていること、
 文内部の接続関係を念押しするような形で示したもの
 であると考えられるだろうか。

文中の「サテ」の[つなぎ]の意味・機能に関しては、
 これは、現代語の談話におけるフィラーのような役割
 を果たしていると考えられるだろうか。

このような役割を果たす「サテ」について、抄物資
 料中では、

- ・同一話者の発話中に見られる場合が多い。
- ・その「サテ」を省略しても、発話内容（文の意味）
 は変わらない。

なども観察できる。また、このような「サテ」は、
 感動詞としての意味・機能をもつ「サテ」と連続性が
 考えられることも、用例よりみてとれるようである。

(8)

『天草版 伊會保物語』

・文頭「サテ」

（順接 場面の展開）

「～、口を揃へてイソボにこれを言ひ負せて、こち
 はそらうそふいてゐて、あれこそその熟柿をば食べた
 れとはねかけうずるに、何の子細があらうぞ」と談合
 して取つて食した。

さて食し終わつて後、互ひに目はじきして言ふやう
 は、「さて無果報なイソボかな！～」

（410頁18行「イソボが生涯の物語略。」）

（～、口を揃えてイソボにこれを言い負わせ、こち
 らは嘘をついて、あれこそその熟柿を食べたのだと
 （罪を）かぶせるのに、何の障りがあるうか、いやな
 い。」と相談し合つて、柿を取つて食べた。そうして、
 食べ終わった後で、互ひに目くばせをして言ったこと
 には、「なんと不調法なイソボであることか！～」）

・文中「サテ」

（話の切り出し）

「先の諍ひを語つたれば、シヤントは大きに驚いて、
 「さて何とせうぞ？偏に汝に任するぞ、この事を何と
 ぞ計略してみよ」と言はれたれば、～」（418頁6行「イ
 ソボが生涯の物語略。」）

（先の争いを語つたところ、シヤントは大いに驚き、
 「____どうしようか？とにかくお前に任せる。この事
 を何とか考えて対応してみよ。」と、言われたので～）
 『天草版 平家物語』

・文頭「サテ」

（順接 場面の展開）

「～、二三百騎ほどづつあそこここに押し寄せ、押
 し寄せ搦め捕つてござる。さて成親卿のもとへ申しあ
 はせうずることがあるほどに、きつと立ち寄せられ
 よと、言ひおくられたれば、～」（巻第一 第三 成
 親卿車争ひゆゑに、平家に対し謀反を企てられたこと
 が現れ、その身をはじめ、くみしたほどの者搦め捕ら
 れ、そのうちに西光といふ者は首をうたれたこと。）

（二、三百騎ほどづつ、あそこにもここにも押し寄
 せ押し寄せして、搦め捕つた。そして次に、成親卿の
 もとへ申し合わせるべきことがあるので、きつと立ち寄
 せられよ、と言ひ送られたので、～）

（話題の転換）

「～、などと詠うで、みなもの笑ひにしました。
さて大将維盛は福原の新都へ歸りのぼらるれば、清盛
 は大きに腹をたてて、～」（巻第二 第十 平家の兵
 ども鳥の羽音に驚いて、敗軍して面目を失ひ、京への
 ばれば、頼朝は軍に勝つて鎌倉へ歸られたこと。）

（～、などと歌を詠んで、皆物笑いの種にしまつた。
ところで、大将維盛は福原の新都へ歸つたところ、

清盛は大いに腹を立てて、～)

(話の切り出し)

「さて平家の一門のうちに都にとどまられたはなかったか？」(巻第三 第八 平家の一門は都を落ちるるそのうちに池の大納言殿は都にとどまられたこと：同じく福原を立たるとて、一門の人々なごりを惜しめたこと。)

(「_____平家の一門のうち、都に留まれた方はいなかったのか?」)

・文中「サテ」

(話の切り出し)

「若君姫君も筆を染めて、さてお返事は何と書かうぞとおほせらるれば、北の方だともかうもわ御前たちの思はうずるやうに書けとおほせられたれば：～」(巻第四 第十 都で平家一門の首を渡いたことと、三位の中将夫婦の沙汰。)

(若君も姫君も筆に墨を付け、「_____お返事は何と書きましょうか。」と仰せになるので、母親の北の方は、「ただ何とでも、あなた方の思うようにお書きなさい。」と仰せになったので～。)

(単純な接続)

「頼政は伊豆の国をくだされて、子息の仲綱は受領せられ、わが身は丹波の五箇の庄、若狭の東宮河を知行して、さてあらうずる人がよしないことを思ひ企て、わが身も、子孫も滅びられたことは、まことにあさましい次第でござった。」(巻第二 第八 新三位入道の由来と、同じくその鵠を射られた高名のこと。)

(頼政は伊豆の国をいただき、子息の仲綱はそれを受領され、頼政自身は丹波の五箇の庄、若狭の東宮河を知行して治め、そうして良いようにされていた人が、善からぬことを思ひ企て、わが身も子孫も滅びなさってしまったのは、まことに残念なことであった。)

・文頭「サルホト二」

(話題の転換)

「～。その上、鎮西から菊池、原田、松浦党五百余艘の船に乗って、屋島へ寄すると、きこえたれば：これを聞き、かれを聞くにつけても、心をまどはし、魂を消すよりほかのことはなかった。さるほどに七月二十五日にもなれば、去年のけふは都を出て、あさましくあわて騒いだことどもを思ひ出して語りだし、泣いて笑いつせられた。」(巻第四 第十五 池の大納言関東へ下られたこと：また三位の中将の北の方のこと。)

(～。その上、鎮西ということで、菊池、原田、松浦党などが五百余騎の船に乗って屋島へ攻め寄ってくるということが伝わってきて、これを聞き、あれを聞

きしても、心を当惑させ、気持ちがふさがるよりほかの事はなかった。(話変わって)七月二十五日にもなると、去年の今日は、都を出て、さんざんな様子で、慌て騒いだことなどを思い出して語り出し、泣いたり笑ったりされた。)

『コリヤード 懺悔録』

(話題の転換)

「～。さりながら今コンヒサンの覚悟の為にその借の金を皆調べてござるに依て今日中に済しまらせうず。さて又我等渡海せらるる衆にその商ひの為に万事にも金を貸しませう。～」(原文48頁20行「七番のマンダメントに就いて。」)

「～。しかしながら、今、コンヒサンの覚悟のためにその借りたお金を皆調べたので、今日中に(支払いを)済ませます。ところでまた、私たちは渡海する人々にその商ひの為にと萬につけてお金を貸します。」(話の切り出し)

「さて：一番の御掟に就いての科を申し顕す所に、先づ、二三度ゼンチヨとキリシタンの取沙汰に就き物語を承つて～」(原文16頁9行)

(_____一番の御掟についての科を申し顕す際に、まず、二三度ゼンチヨとキリシタンの取沙汰について物語を承つて～)

・文中「サテ」

(つなぎ)

「～これはさて御慈悲と申しても赦させらるる程ござるまいと存じて頼母しを失ひました。～」(原文24頁7行)

(～これは_____御慈悲と申しても赦していただけることはないだろうと思い、ひたすらな信仰を失ってしまいました。)

・『どちなきりしたん』

(順接 場面の展開)

師「～。そのゆへはばうちずもの御さづけをうくる人々を此くらゐにあげたまはんとおぼしめすによなり。」

弟「さてきりしたんにあらざる人はいかん。」

(4才17行 第一 きりしたんといふは何事ぞといふ事)

(「～その理由は、洗礼の御授けを受ける人々を、此位に上げなさろうと思しめすによってである。」「そして次に、キリシタンではない人はどうなりましょうか。」

(9)

小林千草(1992)『日本書紀抄の国語学的研究』清文堂出版 中の記載による。

【参考】

「サテ」の語誌

「サテ」は上代語においては副詞として「そうして」、「そのまま」といった意味で用いられていた。「住吉の岸を田に墾（は）り蒔きし稲乃而（さて）刈るまでにあはぬ君かも」の例が『万葉集』2244の歌に見える。

接続詞としては、「『サテ、サテハ、サテマタ、・・ソノホカ』。これらすべてはある段階すなわち事柄を、他の結びつけるのに、すなわち、『我々が』その上、などという場合に用いられる。」（大文典）とし、①前件に引き続く後件を述べるのに用いる。「先、水ヲ洒キテ、サテハク也」（応永本『論語抄』）②前件を受け、その当然の帰結としての後件を導くのに使う。「天子ノ事ヲ詩ニ多ク作タホトニ、サテ天使ヲ敬テ謹ト云ゾ」（山谷詩集鈔）③前件にさらに添えるべき条件をあげるのに用いる。「吾ヨリモ歳兄デサテ物ヲ知タ人ナらば〜」（古文後鈔）④前件を承けて、当面の話題を転ずるのに用いる。「サテ事已ニ定テ後、軍評定ノ為ニ〜」（太平記）⑤それまでの事情や話題を承けて、

相手に問いかけるのに用いる。「此事ハ已ニ〜討手ヲ被定テ候。サテ何ニ定タルゾ」（太平記）

などの用例が見える。（以上、『時代別国語辞典』（上代編・室町編）

指示副詞「サ」に助詞「テ」がついて成立したもので、和文資料中での接続詞としての用例は、①先行文をうけて、次文が始まる。「行けどもえ逢はでかへりけり。さてよめる。」（伊勢物語）②順接「やうてう僧都に魚を奉る所なり。さてしるしのぞく」（宇治拾遺物語）③逆接「ともかくも御心。さてつかひよしとは〜」（落窪物語）④話題転換「さて、かぐや姫かたちの世に似ずめでたきことを〜」（竹取物語）、「さて、いとひさしくまからざりしに、ものの便りに立ち寄りて侍れば〜」（源氏物語）などがある。（以上、『角川古語辞典』）

現代語では、接続詞としての意味・機能のほか、感動詞としても発話中で用いられ、①感心したりしたときの語。はてさて。まあ。「さてすごい話だね。」②何かをしようとするときに発する語。さあ。「さて何かから手をつけようか。」などの例がある。（以上『広辞苑』）

ももせ みのり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻